

# 現代社会に主体的に生きる自己を確立するための思考力の育成 —社会的事象を身近にとらえさせるアクティブ・ラーニングを通して—

長期研究員 緑川 祐

## 《研究の要旨》

生徒たちは社会に出てから、答えのない問題に向き合う場面が多くなるであろう。したがって公民科の学習においても、生徒たちが主体的・対話的に学ぶことで、社会的事象を自らの問題として多面的・多角的にとらえ、社会の一員として自覚することを促したい。本研究では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を試み、主体性を育む思考力の育成をめざした。

## I 研究の趣旨

現行学習指導要領の公民科では「広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察」する能力を育成することが求められている。また、次期学習指導要領改訂に向けた「論点整理」（中央教育審議会、2015年8月）でも「答えのない問題に自ら答えを見いだしていく思考力・判断力・表現力」の育成が課題であるとされた。現状は、例えば倫理において「単に思想家や思想についての知識を習得する科目」という認識で教師が授業を行っている（日本学術会議、2015年5月）という指摘がある。この指摘は、学習内容を自分自身の問題として考える必要性を自覚させないまま、暗記再生型の授業に終始しているということである。

したがって、現代社会に主体的に生きる自己を確立するための思考力を育むことが課題である。この課題に対応するためには、社会的事象に対して、自分と他者の間にある見方や考え方の違いを見だし、それらを人間、科学、自然などの側面に結び付けて考察できる力の育成が必要である。

以上から、アクティブ・ラーニングを通して社会に主体的に向き合う態度を養うことで、多面的・多角的に思考できる生徒を育てたいと考え、本主題を設定した。

## II 研究の概要

### 1 研究仮説

公民科の授業において、以下の視点に基づいた手だてを講じれば、社会的事象を身近にとらえさせ、現代社会に主体的に生きる自己の確立に向けた思考力を育むことができるであろう。

【視点1】 既習の知識や概念と自分との関わりを見いだす工夫（対自化）

【視点2】 他者と自分との関わりを見いだす工夫（相対化）

【視点3】 社会と自分との関わりを見いだす工夫（深化）

### 2 研究の内容（倫理での実践を例に）

#### (1) 生徒の実態把握

研究計画に基づいた授業実践に先立ち、研究協力校の該当生徒40人に意識調査を実施した。特に「倫理の授業に、現在・将来の自分に生かせる何かを期待しているか」の質問に対して、肯定的回答は9人とどまった。理由は「難しいから」「自分が希望する職業には関係がないと思うから」などであり、学習内容を自分の在り方生き方に結び付けていない現状が明らかとなった。

#### (2) 各視点における手だて

##### ① 【視点1】 対自化

「対自化」とは、生徒が学習した知識や概念が、自分に身近であることを見いだす活動である。社会的事象が、自分にどのように関わるかなどを、理由を含めて生徒各自で思考する。手だてとして、社会的事象と自分との関連をイメージマップに記述させることで可視化し、関連すると生徒が考えた理由も文章で書かせる。

##### ② 【視点2】 相対化

「相対化」とは、生徒が【視点1】で関連付けたこととその理由について他者からの感想を得ることによって、自分の考えを多角的にとらえ直すための活動である。手だてとして、4～5人のグループを作らせ、各自のイメージマップをグループ内で発表させ合う。関連付けた理由に対して共感的感想と批判的感想をグループ内の他者に述べさせる。その際、感想を述べる側には前もってワークシートに共感と批判の感想を記述させておくが、ここでは記述内容を声に出して伝える活動を重視する。最後に、活動の感想を書かせることで振り返りとする。

##### ③ 【視点3】 深化

「深化」とは、【視点2】で培った多角的な見方に加え、社会的事象を多面的に思考できるようになることをめざす活動である。現実の出来事を題材に、立場が異なる人々の考えや、それらから結び付く様々な側面を踏まえた考察を通して、思考を深めることがねらいである。手だて



生徒がいる一方、〈しないほうがよいこと〉に書いた生徒もおり、関連付けの違いから互いの理由について関心をもたせることができた。

### ② 他者と自分との関わりを見いださせる工夫

自分が関連付けたことを、理由を含めて各自でグループ内に説明し、共感的感想と批判的感想を互いに述べた。「インフォームド・コンセントはよいことだと思っていたが、別な角度から見ると、自分の病気について知りすぎて生きることに不安を抱いたり、精神的に辛くなるかも知れないと思った」といった、多角的な視点に気付いた記述が多く見られた。

### ③ 社会と自分との関わりを見いださせる工夫

「医療技術の発達は明るい未来をもたらすか」について議論を行った。生徒には、自分の考えが学習内容（知識や概念、図表資料）のどこに根拠があるかを意識させた。その結果、多くの生徒が根拠を示しながら、医療従事者と自分たちといった多角的な見方や、法整備や福祉、財政など多面的な見方で発言あるいは記述できた。

また、事後調査の前に単元の振り返りとして再度イメージマップを書かせた。授業実践Ⅰでは振り返りが不十分だと感じ、学習活動による考えの変容を授業者が可視化させようと考えたためである。ほとんどの生徒が、生命倫理に関わる知識や概念のとらえ方に変化を生じさせた（図4）。一例を挙げると、この生徒は出生前診断のとらえ方を、「対自化」の段階では〈するべき〉に分類したが、「深化」の活動後は〈しないほうがよい〉に分類した。その理由を「出生前診断によって異常が判明した妊婦は9割が中絶をする。中絶は、理由はあるのだろうが、やはり命を奪うことだから」とした。妊婦の視点や倫理的側面を踏まえ、自分の考えを深めたと判断できる。

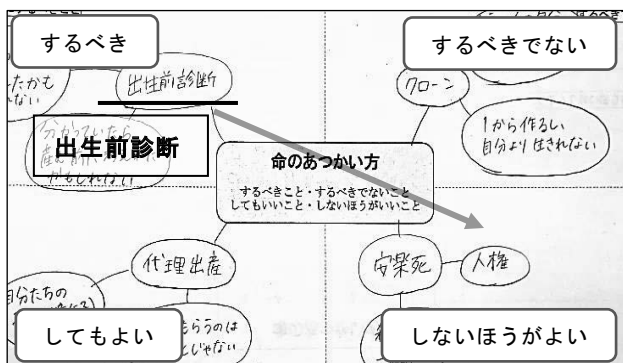


図4 4分割したイメージマップ（対自化）

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 研究の成果

2回の授業実践で、事前・事後調査の比較により思考の深まりが読み取れた。特に実践Ⅱでは、「医療が充実し

た日本に生まれ てよかったと思 うか」という質 問に、「医療の充 実」と「生の充 実」との両面を 踏まえた記述を した生徒がおり、 思考が深まった

#### 【事前】

よかったと思う。医療が充実すれば 不治の病も不治じゃなくなるから。

#### 【事後】

医療が充実すれば長生きできるが、 全身チューブでつながれて生き延び る状況は疑問だと思った。医療技術の 充実が必ずしも人間としての生の充 実とは限らないと思う。

図5 生徒の記述例（事前・事後）

と判断できる（図5）。Ⅱ-2(3)で示した評価「3」に到達できたと判断された生徒数も、実践Ⅰより実践Ⅱの方が多（図6）。これは、回を重ねるごとに多面的に思考できる生徒が増加したということであり、思考力の育成に焦点化して実践を繰り返した結果だと考える。

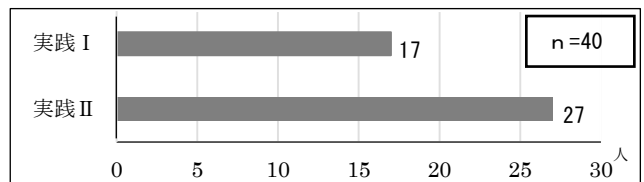


図6 評価「3」に到達した生徒数

また、実践終了後に、「学習した内容は、自分の現在・将来に生かせようか」と聞いた。実態把握の時点では、同じ質問に肯定的回答をした生徒は40人中9人だったが、実践後の肯定的回答は36人になった。理由としては、「人としての生き方などを様々な角度から学ぶことができたから」「学習した内容が自分の考えと近いと思うものもあれば、この考えは自分とは違うと思ったものもあり、周りの生徒にも色々な意見があつて勉強になったから」などが多かった。以上のことから、「対自化」から「深化」の過程を重視し、他者との関わりを通して社会的事象に対する主体的な見方や考え方を培う指導の有効性を確認できた。

### 2 今後の課題

主体的に生きるための思考力を、より多くの生徒に身に付けさせることが、一層の課題である。そのためには、各実践における記述活動をより効果的に行う必要がある。例えば、「対自化」から「深化」の過程で、多面的・多角的に思考していることを生徒本人が自覚できる記述の在り方などを、考えていきたい。

また、学習の方向性・目標を生徒自らが把握しやすいよう、授業者が作成したルーブリックを簡略化するなどして、評価規準をある程度示しておくことも必要である。学習に対する目的意識を、授業者と生徒が共有して授業に臨めるようにしたい。その上で、生徒が社会的事象に主体的に向き合う発問の在り方も工夫していきたい。